#シーズン２　プロローグ

#シーズン２　プロローグ

第二季 序章

#

#「ひどい目に遭ったにゃあ……」

「真是不得了喵……」

#自室でひとり、香か穂ほはぐんにゃりとため息をつく。

一个人在房间里，香穗呼呀地叹了一口气。

#放課後、たまたま学校に残っていたら、れな子に呼び出されたのだけど。そこにはなぜか高田卑弥呼率いる一派が待ち構えていて、香穂は暴力的な謝罪の渦に飲み込まれたのだった。

放学后，碰巧留在学校的那天，自己被玲奈子叫走了。但不知道为什么，到了地方发现高田卑弥呼的一帮人在那里等着自己。然后强行开始对自己道歉。

#謝罪自体は善意からの行動だとしても、受け取る側にもかなりの忍耐力を要求された。っていうかメチャクチャ疲れた。

道歉这件事本身是发自于善意的行为，但这种行为对于接受歉意的一方的耐心有相当高的要求。因此，香穗已经筋疲力尽了。

#「まさか、高田卑弥呼と根本ミキの出会いに、あんな凄まじい過去があったとはにゃあ……」

「还是说，和高田卑弥呼相遇根本就是孽缘，没想到她经历了那么悲惨的事情喵……」

#夕日も沈む頃に帰ってきた香穂は、さてどうするかと机に向かう。漫画やアニメでも見るか、はたまた次のイベントの準備を進めるか。

直到夕阳西下才回到家的香穗，面朝桌面，想着接下来做点什么好。是看漫画或动画，还是做一下下次活动的准备呢。

#コスプレフェス以降、香穂のフォロワーは順調に増えている。

Cos节之后，香穗的粉丝数顺利地增长着。

#心無い人からは、フェスでの順位をネタにされることはあるけれど、出場したというステnータスによって得られる恩恵のほうが遥はるかに大きかった。

#というわけで、最近はまたコスプレへのモチベが高いのだ。

#今のうちにたっぷり稼かせいでおけば、もしかしたら年末か、あるいは来年の夏には、コスプレ写真集なんてものまで作れるかもしれない……！

#漫画で育った香穂にとって、自分の本を作るというのは憧あこがれだった。

#もっとも、ソロ写真集にするかどうかは、迷いの種ではあったが……。大量に売れ残ったら心壊れちゃうなあ、的な意味で……。

#「って、そんな先のことで悩んでても仕方ない！　うっし、服つくるかー」

#立ち上がったところで、家のチャイムが鳴った。

#「およ」

#そういえば、きょう約束していたのだった。とてててと玄関に向かう。来客は、芦あしケが谷やの制服を着た、黒髪の美少女。琴こと紗さ月つき。もうすっかり足もよくなったようで、何よりだ。

#「こんばんは」

#「サーちゃん、おかえり！」

#「お邪魔するわね」

#琴紗月は優美な仕草で脱いだ靴を揃そろえると、髪をかきあげながら立ち上がる。

#「ほわー……」

#「……なに？」

#「映ばえヤベーなーって」

#ぜんぜんわからないという顔をする紗月だが、これは日常茶飯事だ。

#もともと琴紗月は香穂にとってまったく絡からんだことのない人種であり、それはおそらく琴紗月も同様で、お互いにはまったくと言っていいほど共通言語がなかった。

#香穂が漫画、アニメを好むのに対して、紗月が読む本は基本的には純文学。図書館に置いてあるものばかり。あればライトノベルも嗜たしなむそうだが、香穂が慣れ親しんだネット関係の用語にはめっぽう疎うとかった。

#「サーちゃん。なんであたしとサーちゃんって、仲良くできているのかな」

#「なによ急に。別にそんなに仲良くはないでしょう」

#「ズバッと言いますにゃあ！　でもそんなサーちゃんの顔面が、あたしは愛いとおしいヨ♡」

#「そうね。私もあなたのくれる労働の対価がなにより好きだわ」

#しいてあげれば、こんな風にお互い、言いたいことを言い合えているからかもしれない。

#利用するし、利用される明確なわかりやすさが、居心地よかった。

#（まあ、顔面が愛おしいっていうのは、間違いないんだけどね）

#紗月を部屋に招いて、早速、出来立てホヤホヤの衣装に袖そでを通してもらう。

#次回の撮影会には、再び紗月に出てもらう予定で、本日はその衣装チェックだった。

#香穂はこの瞬間が、楽しみで仕方ない。

#「どう!?　サーちゃん！」

#「…………キツくは、ないわ。ちょうどいい。だけど……」

#新作の衣装。それもかなり脚を露出させたきわどいハイレグの格好を見下ろして、紗月は柳りゆう眉びを寄せた。

#「…………なんだか、また布面積が減っていないかしら」

#「えっ、そうかな!?　確かに、今回の衣装はフェイクレザーのレオタードがウリだからね！　異世界モノの女剣士だよ！　サーちゃんにぴったり！」

#「そう……」

#釈然としない顔で、紗月は鏡に映った自分の姿を確認している。

#その一方で、香穂の胸には、台風紗月号が襲来している。

#（ああっ、サーちゃん……！　なんて、なんて麗うるわしい……！　二次元衣装がこんなに似合う人間、他にぜんぜんいないっすよホントに……！　あたしの作った衣装から、歓喜の歌が聞こえてきちゃう……！）

#なんかもう、舌なめずりをしそうなほどに、テンション極きわまっていた。

#（圧倒的な本物の輝き……！　サーちゃんが衣装を引き立てて、衣装がサーちゃんを引き立てる……！　レイヤーとしてハチャメチャに悔しいけど、衣装制作屋としてはこんなに嬉しいことはなくて……！　ふたつの人格に引っ張りっこされて、分裂しちゃいそう！）

#香穂は倒錯的な喜びに震える。

#陽キャと陰キャというふたつの顔を使い分ける香穂だが、まれにその感情がごちゃるときがあって――だいたいは紗月かれな子相手なのだが――そんなときは、どうしても素すの自分が表に出やすくなってしまう。オタクで陰キャな小こ柳やなぎ香穂だ。

#「サーちゃん、本格的にコスプレイヤーやってよ！　世界を獲とれる才能あるよ！」

#「嫌よ。興味ないもの」

#「く～～～～！」

#これで相手がれな子なら、思わず石で殴りかかってしまうところだが、相手が紗月なのでもう仕方ない。

#家計を助けるためにアルバイトをしているような、まっとうにお日様の下を歩く上位存在に、自分の大好きな世界を一いつ蹴しゆうされるのは、なぜかほの暗い悦よろこびを覚えてしまうのだ。オタクのよくない面だった。

#「サーちゃんのそういう冷たいとこ……好き！」

#「そろそろ脱いでもいいかしら」

#「あと写真六万枚撮ってからでいい!?」

#「脱ぐわね」

#紗月につれなくされても、ニッコニコの香穂であった。

#「ねえ」

#制服に着替え直した紗月が、髪を直しながら尋たずねてくる。

#「香穂は、私のことが好きなの？」

#「およ」

#珍しい質問だった。というか、紗月が能動的になにかを聞いてくることが珍しい上に、自分がどう思われているかを気にしているだなんて。

#普段ずっと他人に興味なさそうにしているサーちゃんにも、かわいいところがあるんだにゃあ……と思いつつも、さらっと答える。

#「うん、好き！　顔が特に好き！　推おせる！」

#「そう」

#空白の時間。

#紗月は香穂を見つめて、そして。

#

#「だったら、私と付き合える？」

#

#首を傾かしげる。

#「それは、どーゆー？」

#香穂の問い返しに、紗月は答えず。

#おもむろに立ち上がった。

#「なんでもない。用が済んだなら、もう帰るわ」

#「あっ、サーちゃん――」

#感情を捨て去ったように、足早に立ち去る紗月の後ろ姿を見て。

#香穂は直感的に理解する。

#このまま見送ってしまったら、紗月が今の話題を口に出すことは二度とないだろう、と。

#別段、それで香穂が困るわけではない。ではないのだが――。

#「どっせぃっ！」

#「きゃ――」

#香穂は紗月の腰にタックルを食らわした。一緒になって倒れる。

#抱きつかれた状態の紗月が、振り返って怒りをあらわにした。当たり前の反応だった。

#「い、いきなりなにするの!?　なに考えているの!?」

#「なんにも話してくれないサーちゃんが悪い！」

#「いきなり人に暴力を振るうほうが悪いに決まっているでしょう！」

#それは確かに。

#「ゴメンナサイ」

#なんの躊ちゆう躇ちよもなく土下座する香穂に、紗月は毒気を抜かれたようにため息をついた。

#「まったく、無茶苦茶なことをして……。甘あま織おりの悪いところがうつったんじゃないの」

#「それはあるかも！」

#廊下で正座したまま、紗月を見上げる。

#「で、どうしたの？　あ、わかった。グループで余ってるのがあたしとサーちゃんだけだから、もうふたりで付き合えばよくない？　ってそういうこと？」

#「……違うわ」

#紗月は髪を整えている。とりあえず、すぐに帰ろうという意思は見受けられない。

#猶ゆう予よ時間をもらえたようなので、んー、と香穂は腕組みをする。閃ひらめいた。

#「もしかしてサーちゃん、れなちんのことが好きだった……!?　だから傷心して……！」

#「殴るわよ」

#殴られたくないので、話を変えることにした。

#だったら。

#（当てちゃいそうで嫌だにゃあ……）

#思いつつも、口に出す。

#「マイのことが好きだった、とか」

#「…………」

#紗月は、やはりというかなんというか、押し黙った。

#自分も前に、真唯に告白したことがあるので、多少気まずい。

#けれど、きっぱりと。

#「違うわ」

#「ありゃ」

#その態度は、本当に違うみたいだ。だとしたら、香穂にはいよいよ理由が思い当たらない。いや、もしかして。

#「アーちゃんが好きだった!?」

#それいちばん泥沼じゃん！

#「瀬せ名なのことは……まあ、好きだけど、そういう好きではないわ」

#わかる。香穂だって紫陽花あじさいのことは好きだ。優しくて、かわいくて、おっぱいも大きい。だが、そういうことでもないらしい。

#「ねえねえ、サーちゃん」

#香穂は紗月の制服の裾すそをちょこんとつまむ。

#「ごめんね。あたし、サーちゃんの気持ち、わかんないよ」

#紗月は香穂の手を振り払わなかった。

#「……どうして謝るの」

#「だって、友達が悩んでいるのに、力になってあげられないんだもん」

#「それは……ずいぶん、身勝手な言い分ね。私がそれを求めているかどうかなんて、関係ないのかしら」

#「うん」

#こんなときでも、香穂は平然とうなずくことができる。

#「あたし、いっつもふざけてるじゃん？　それで学校のみんなと仲良くなったり、かわいがってもらっているんだけど。でもね、ホントはそれしかやり方を知らないんだ」

#「……」

#紗月は黙って、その言葉を聞いている。

#「だから人間関係の深い話って、実はぜんぜんどうすればいいかわかんなくて。いっつも茶化したり、オチ担当したりしてる。けど、今はそれじゃいけないって思ったから、おなか割って話すことにしてる」

#「……腹を割って、よ」

#「それ」

#ビシと指差す。

#だめだだめだ。こういうところがいけないんだ。首を横に振る。

#「だから、えーと……。あたし、サーちゃんの気持ち、教えてほしい。他の誰にも話せないようなことなら、なおさら」

#「……本当に、苦手なのね」

#香穂は頭をかく。

#「いやあ……。陽キャのコスプレっていっても、できないことができるようになったりはしないからにゃあ……。ごまかすのは、上手になったんだけどねえ」

#紗月は諦あきらめたように、息をついた。

#「あなたは今まで、好きな人はいた？」

#「え？　まあ、そりゃ……マイマイとか」

#どうだろう。質問の答えとしては、あまりしっくりこなかった。真ま唯いは恋人になりたい相手であって、特別に好きかと聞かれると……。

#どちらかと言えば。

#ふわふわとした気持ちが形になる前に、紗月がその先を紡つむぐ。

#「そう。私はいなかったわ」

#「うん」

#それっぽい。

#「物語の中にだけある、おとぎ話のようなものだった。私にとっての恋愛は。家庭環境のせいも、多少はあったかしらね。私の人生に、恋愛なんて必要なかったの」

#それがとても寂さびしいことのように、紗月は語っていた。

#いったいどうして。

#「でも、まだ高一なんだから、好きな人がいない子のほうが、多いんじゃ。あたしたちの周りが、ちょっと特別なだけで」

#「そんなの関係ないわ。だって――」

#紗月が歯を食いしばる。

#「真唯にはもう、好きな人が、いるもの」

#それは……？

#「香穂」

#「うん」

#直後、香穂は「ふぎゃ!?」と鳴いた。

#紗月が香穂の両耳を、手のひらでムリヤリ塞ふさいできたからだ。

#なにも聞こえない香穂の前、紗月がその唇を動かす。

#「――あの真唯が、なにをしていても空虚で寂しそうだった真唯が、まるでようやく自分の家に帰ってきたような顔をして。恋愛ってそんなに夢中になれるようなことなの？　だったら、どうして私はそれがわからないの？　真唯ばかり、あんな」

#その一言一言が、まるで釘を打ちつける金かな槌づちのように重く。

#ただ、香穂が浴びるのはそれらの言葉ではなく、紗月の形ぎよう相そうだけ。

#「……あんな風に、泣きながら、微笑んで……」

#幕まく張はりメッセのステージ上。れな子と紫陽花に挟まれた真唯は、この上なく幸せそうだった。

#そのことがなによりも許せないと、紗月は香穂にではなく、きっと己おのれ自身に告げる。

#「私も知りたいの。恋愛がどんなに素晴らしいものか。あるいは、本当はどれほどくだらないものなのかを」

#真唯の結実は、紗月にとっての始まりでしかなく。

#今一度。

#

#「間違っているのは私か、あるいは真唯か。その答えを知りたい――」

#

#そう、言ってから。

#紗月は、香穂の両耳から手を離した。

#「――以上」

#香穂はぼんやりと紗月を見つめる。

#「サーちゃん」

#「ええ」

#「なんか言い切った顔をしているところ悪いんだけど、あたし、なんにも聞こえなかったヨ」

#「そう、安心したわ」

#誰の言葉も必要としていない紗月は、髪を翻ひるがえす。

#「もし聞こえていたら、あなたのことを始末しなければならなかったから」

#「そんな呪いのメッセージ、手で耳を塞いだだけの人に言うんじゃないよ！」

#さすがにこれは、正当な抗議だと、香穂は思う。

#そのときだった。

#静まり返った廊下に、振動音が鈍にぶく鳴った。

#紗月はすでに、面つらの皮をはぎ取ったかのような無表情に戻っていた。ポケットからスマホを取り出して、つぶやく。

#「……珍しい」

#香穂に視線で許可を取り、紗月は背を向けた。

#「はい、もしもし。おばさま？」

#教師を前にしたように、紗月がよそ行きの声で喋しやべっている。そうしていると、一いち分ぶの隙すきもない完璧美少女である。

#「ええ、それは構いませんけれど……。はい、わかりました、はい」

#電話は手短に切れた。紗月は改めて立ち上がり、ぽつりと。

#「お邪魔したわね」

#そう告げて、玄関へと向かっていく。

#「えーと、サーちゃん！」

#「なにかしら」

#玄関で靴を履はく紗月を見送るついでに、香穂は唇を尖とがらせて、告げる。

#「よくわかんないんだけど、サーちゃんも誰かステキな人を見つけちゃって、グループで恋人いないのがあたしだけってなったら、さすがにそれは寂しいんだからね！」

#「そのときは、甘織にでも告白すれば？」

#「どんだけれなちんに業ごうを背負わせる気!?」

#駅まで送ると申し出たが、紗月はひとりでさっさと帰ってしまった。

#部屋に戻った香穂はクッションを抱きしめて、ぼんやりと視線を空に浮かべる。

#恋はまだよくわからないけれど。焦あせる気持ちは香穂にだってある。

#クインテットは心地よいグループだ。高校三年生まであの五人で変わらずいられたら、きっと幸せだっただろう。だが、そうはならなかった。

#身近な三人がくっついて、それでも変わらないままでいられるほど、自分は強くないから。

#「こうしてみんな、少しずつ大人になっていくんだにゃあ……」

#そうつぶやいて、香穂はごろんと横に倒れたのだった。

#

#そして、香穂の知らないところで、紗月の物語は動き出そうとしていた。

#

#＊＊＊

#

#清潔な会議室に、琴紗月が顔を出す。

#電話を受けた直後、紗月の下もとには迎えが送られた。その車に乗って到着した先は、情報と流行の発信地、渋しぶ谷やにあるクイーンローズのオフィスビルだった。

#凜りんと背を伸ばしていれば、紗月の立ち振る舞いはデザイナーズビルにもよく似合っていた。大勢のモデルが出入りするそのうちのひとりだと、誰もが思うだろう。

#受付に案内されて、会議室に通された。間もなく姿を見せるであろう女性は、この荘そう厳ごんな城の主あるじである。

#「よく来てくれたの」

#ガチャリとドアを開き、王おう塚づか真唯の実母――王塚ルネが現れた。

#彼女は相変わらず、身なりに無む頓とん着ちやくで、研究に没頭する科学者のような雰囲気を漂わせていた。そして助手のように、ひとりの少女をともなっている。

#「ご無ぶ沙さ汰たしています、おばさま」

#「うん。適当に座って」

#上座に腰を下ろすルネの、斜め向かいの椅子に座る。

#壁かべ際ぎわに立つ少女が気になった。

#「そちらは？」

#まだ若い。高校生ぐらいだろう。だが、モデルのはずがない。

#どう見ても背せ丈たけが足りていないし、なによりも一介のモデルが女帝ルネの前で気の抜けた顔であくびを嚙み殺せるはずがない。

#「あ、わたしのことはぜんぜん、お気になさらず」

#紗月がじろりと見ても、肩をすくめるばかり。まとう雰囲気も、どことなくうさんくさい。

#ルネが紙の資料を机に投げた。

#「あなたに来てもらった件と、関係があるの」

#「……」

#なんのために呼び出されたのか、概おおむね見当はつく。王塚ルネはたびたび紗月をモデルにスカウトしたがっていて、あくまでもその余談とばかりに王塚真唯の話を聞きたがった。高校に入ってから呼び出されるのは初めてだったが、これもその延長だろう、と。

#娘の私生活のことはすべて花はな取とりから報告を受けているはずなのに。王塚ルネ曰いわく『またボイコットされるわけにはいかないから』で、それを持ち出されるとかつて悪事の片棒を担かついだ紗月も、なかなかに脛すねの古ふる疵きずが痛むわけで。

#もし真唯にバレたら『密会』と後ろ指を差されても否定できない状況だが、それを言うなら真唯だって自分のいないタイミングに母と顔を合わせることもあるだろう、と紗月は己の帳尻を合わせて、納得感を捏ねつ造ぞうしていた。

#だが、今回プリントアウトされた資料に写真が載のっていたのは、意外な人物だった。

#甘織れな子である。

#「……これは？」

#「あなたと同じ高校に通うクラスメイト。相そう違いないのね？」

#「ええ」

#なぜ王塚真唯の母親である、王塚ルネが、甘織れな子の写真を持っているのか。

#いや、確かに真唯と関係がないとは口が裂けても言えない人物で、むしろものすごく関係がある人物なわけで……。

#なにかとんでもないことが始まろうとしている――という予感だけが、熱気球のように膨ふくらんでゆく。

#「一度だけ、ショウで顔を合わせたことがあって、そのときにはあの子の友人と名乗っていたの。ただ、本当にただの友人なら、花取が興信所に甘織れな子の調査を依頼する理由がない」

#「……花取さんがそんなことを？」

#「ええ」

#それは。

#まずいのではないだろうか、と紗月は目を逸そらした。

#一応、甘織れな子は友人（と一度は認めた相手）だし、彼女が東京湾に沈むと、泣く子もいるだろうから、なんとか取り繕つくろってやりたいけれど……。

#ルネは新作のカタログスペックを披ひ露ろうするように、事実を淡々と述べてゆく。

#「調査報告がね、我が家に届いていたの。悪いけれど、花取が見つける前に回収させてもらった。だから、ここから先のことを一切、花取は知らないの」

#「そう、なんですか」

#「いやー」

#そこで、壁の花と化していた少女が、口を挟んできた。

#「ほんとはこういうのよくないんですけどね。でも、同じ学校だからってことで調査員に抜ばつ擢てきされた見習いのわたしが、クイーンローズの社長さんに脅おどされたら、そんなの従うしかないじゃないですか。というわけで、こちらが結果報告なんですけども」

#どうやら彼女は興信所の調査員らしい。つまりは、うら若き探偵ということか。

#言われてみれば確かに、世間慣れした態度は、どこか母親の勤め先の女性たちに似ている気がした。

#なぜ、花取単ひと衣えが甘織れな子の身辺調査を依頼していたのか、それはもちろん彼女の主人と甘織れな子の関係を疑ってのことだろう。

#花取に、あの不実な関係性を知られることがなかったのは不幸中の幸いだが……。そのせいで、れな子はさらに窮きゆう地ちに追い込まれたかもしれない。

#よりによって、真唯の母親にバレるとは。

#「あなたは、知っていたの？」

#写真には、甘織れな子の他に、王塚真唯と、そして瀬名紫陽花が写っている。

#もはや、決定的だ。

#紗月は、甘織れな子のために、自分が多少の危険を冒おかしてでも弁解するべきかどうかを逡しゆん巡じゆんし、それから半ば義務感に突き動かされて、口を開いた。

#「あの、おばさま。彼女は、決して――」

#ルネがその言葉を塗り潰つぶすように、告げてくる。

#

#「――彼女が、四人の少女と同時に交際をしている、って」

#

#……。

#紗月は、目を瞬しばたたかせた。

#四人？

#「……誰が、ですか？」

#「認めたくない気持ちも、わかるの」

#ルネはまるで労いたわるような目をしていた。いまだかつて見たことがないルネの表情だ。

#資料がめくられた。そこには、琴紗月と、そして小柳香穂の写真があった。

#空き教室で、紗月がれな子に迫っている写真。

#それから、れな子と香穂が、体育館を覗のぞき込みながら体を寄せ合っている写真だ。

#「……ええと」

#「どんな経験も、真唯のためになるのならと、見過ごすつもりだったの。だけれど、これはさすがに、やりすぎだと私は思うのだわ。四よん股また？　しかも女性同士でだなんて、日本の高校は、そんなことが許されるの？」

#ルネの声ににじむのは、怒りではなく、純粋な疑問。そして困こん惑わくだった。

#なんと答えればいいのか。

#「許されはしないと、思いますけれど……」

#「だったら彼女は、なぜ今も塀の中ではなく、のうのうとスクールライフを満喫しているのかしら。こんなことなら、有う無むを言わさずに真唯をフランスに連れていくべきだったの」

#目を伏せたルネの造形は、当たり前だけれど、真唯にとてもよく似ている。けれど、真唯が持ち合わせていない気弱な仕草が、まれに見え隠れすることがあった。

#母親として、娘を救ってやりたいと、もしかしたら本気で思っているのかもしれない。

#少女が胸に手を当てて、はぁぁぁ、と大きくため息をついた。

#「わたしも信じられませんでした！　しかもあの子、わたしがちょっとちょっかいをかけたら、簡単に転がり落ちそうな顔をして……。これは五股だってありえますよ！　社長！」

#「あなた」

#思い出した。どこかで見たことがある少女だと思ったら。

#「あの、なんて言ったかしら、Ｂ組の取り巻きの」

#「え、わたし、卑弥呼ちゃんとはそこまで接点ありませんけど」

#「でも、あのバカみたいな名前のグループの一員なんでしょう」

#少女は笑った。

#「クインテットに対抗するためとはいえ、四人なのに 5déesseゴツデイス って名乗っているのは、確かにバカみたいと言われても、仕方ありませんけど」

#ともかくですよ、と少女は続ける。

#「王塚真唯と付き合い、瀬名紫陽花と付き合い、さらに琴紗月と関係を持ち、さらに小柳香穂をかのピと呼んでイチャラブをしている……。そんな子を野放しにはできないと、社長は仰おつしやっているわけなんですよ」

#少女――照てる沢さわ燿よう子こは、人差し指を立てて、ウンウンとうなずいた。

#紗月は、ルネに視線を戻す。

#「あの、おばさま。彼女は四股をしているわけでは、ないと思います。少なくとも、私とは、付き合っては……」

#言いかけて。

#紗月はふと、思考に沈潜した。

#この状況は確かに、れな子にとっては窮地かもしれない。下手したら湾に沈められてしまう類たぐいの。まあ、二股だろうが四股だろうが、罪の重さには大差ないので、どうでもいいけれど。

#だが、どうだろう。自分には。

#もしかしたら、あるいは。

#『その答えを知りたい――』

#己に強く打ちつけた声がする。本当に知りたい答えを手に入れるために、どれだけのことするつもりがあるのか。覚悟を問う声が。

#そんなものは――。

#紗月は、顔をあげる。

#「おばさま」

#薄く微笑んだ。

#「確かに、私もそう思います。野放しにはできない。ですけれど、甘織れな子の支配力はいまだ強く、単純に真唯を説得するだけでは、逆効果だと思います」

#「娘の恋愛に首を突っ込むのは、親として、恥ずべきことかもしれないの。なによりも、真唯はいまだ学生の身分。それでも」

#ルネが腕時計を見下ろし、ままならない現実に頰を張られたように、言う。

#「……15分だわ。とにかく、あの子は、今が大切なときなの。名実ともにクイーンローズが世界に認められるために、あの子の力が必要なの」

#立ち上がるルネ。

#「はい」

#紗月は、見えないようにぎゅっと拳を握り固める。

#その気持ちを表に出さないように一拍置いて、胸に手を当てた。

#「ですから」

#告げる。

#

#「――甘織れな子については、私に任せてください」

#

#現在進行形で四股かけられている女などという屈辱を受けて、黙ってはいられない――と。そんな大義名分を引っ提さげて。

#娘そっくりの蒼あおい瞳で、ルネが紗月を見つめる。

#「あなたに？」

#「はい」

#大きくうなずいた。ルネはきっと、自分を疑わない。彼女は不器用なだけで、悪人ではないからだ。娘と同じように。

#しかし――燿子が、手を打つ。

#「あ、だったら勝負しましょうよ！」

#「……なにが？」

#「この案件、わたしもお仕事として引き受けようとしていたんですよ。社長は娘さんのことを心配されているでしょう？　だったらほら、ちょうどよかった。探偵の業務の一環で『別れさせ屋』っていうお仕事があるんです。つまりは」

#事業計画を提案するバリキャリのように、燿子が両手を広げる。

#「わたしとあなたで、どちらが甘織れな子と王塚真唯を別れさせることができるか。恋人関係を解消させたほうが、成功報酬をいただける。そういうのはどうですか？」

#「……」

#紗月は押し黙ってから、燿子を見返す。

#なぜ勝負などと言い出したのか、わからない。この女は、いったいなにを考えているのか。だが、本当に金がほしいだけなら、協力できるはずだ。本当にそれだけなら――。

#ゆっくりと、慎重に口を開く。

#「あなたが勝手に動くなら、好きにすれば。私には私の目的があるから」

#燿子はしばらく紗月を見つめた後で、少女漫画の主人公のように明るく笑った。

#「ふふっ、了解です。その辺りはおいおいと話し合っていきましょう。学生生活、なんだか楽しくなりそうですねっ」

#「……ええ、そうね」

#魔女のように微笑む琴紗月と、ひだまりのように笑う燿子。

#対照的なふたりの笑顔を前に。

#「On n'a qu'une vie　人生は、一度きり。あなたには、後悔してほしくないの、真唯――」

#ルネは昏くらい瞳で、写真の人物を見つめていた。

#

#